北窓瑣談　三

イ 5
1601
3

北窓瑣談巻之三

梅華仙史橘春暉輯著

一 人の詞に紀州ハ語る盤ひがたきのとなり出来し実あり
恵声つらび世に流布して去る之しが紀ものうち善事を
云ひ伝へしハ盛徳の事にて少し遺誉のありし也猶ことも
此事も又び居りしが殊に病寿才ちて紀州の内に名を
一 高く公よりも褒美し賜ひけるが年長じく後を織行に
文博史などにてぬきて年々の常人にはなるもなりひてなびてあれ
ど其国の庄屋なりし公の尊免をあれくと御し是見る加へ
されども頭を学入らずとて風説もしらいぶあなるしや是者の

くゝに法をそて思へば善事も称誉となるものもあるに志ざる
し人始何ごとするにあらず一統何事も成りしは上古結
も思ひ合されよ

一我父母終身安穏にして衣食の労無きは誰が庇蔭なる
や古主君の庇蔭なり我身何も〔の〕地より出て何れの
家より我も生じぬ古主君の庇蔭なり我親属安穏にて
我らの奉公続くも皆人は庇蔭なりや古主君の庇蔭を
我身何ごとの度に学び何れの人を師として筆硯をも親し
むやうになりしや古主君の浪岡山先生を師とし筆穀を食
て初年の跡も此の法を終身せしめまさりし又古主君の庇蔭

なりかくも思ひ法られも古主君の原恩我身生涯も更なり
子孫までも忘却せず法を守るなり出来も事新しき
竹をすれど子孫の心得までと加へ絶さぬなり

一漢の代などには租税を定る法粟米四六乃法といふなり
故に漢乃嘉量などは一斛入の升と六斗入の升と一斗升に
てこれを作りたるものなり四六の法とは兵粮用意米など
久しく貯ふる米は粟米まじく百人扶持は一斛之文事分の
扶持米などは米に磨りて元く五勺八六斗なりこれ粟
一斛をとれて米六斗になる故なり日本も王代の頃までは
法を用ひられしや今も禁裡主殿寮の官人乃下行米

を知り所ありしと承るに一石といふ處へ米五斗余斗を納む
るなりて是六斗なれども一斗ハ雑費に引てありしとぞ余り
を知る人ハ主殿寮の下司南山城みかの原村より米を
とるにまかしと語まり近時民家にも一石といふ處へ米
四斗五升を過もてとるなり是既四ツ物成といふあまりなしで
乃多少なるを治世の奇法といふべし

一古人源氏物語に於てハ其文章に錦繍多く称美せざる
人無然ルに中の歌ハ無下に拙しと云へまる人多シ余
思ふに此物語の奇ハ文字ハ一体の風なれバ淡泊悠長成
をむねとし風流の気象なりて余情ありて雑に歌なく
ハ源語前后の所論ニ任せむと又ありしかバ留給ふ也
此物語の奇を他ハ撰集なとの也とく論せん類をもしる
ぞといふ也

一漢字の文章ハ才あるといへとも学問の力薄くしてハ書がたし
是を出まても画なしとも詩まても余韻してを久しく見るに足
さるを同し理ニて其る豪く作なり全躰の地力ありても出
来がたき記しあり文章ハ如何にも記しかし如何無能るべし
ハ金玉篇をも一句をも組く出来し其上なりけれハ助字を惜
みて金玉のごとく用居し法道見の文字助字少し漢書も
多分ハ読む也然く捨て文章乃助字を乞を極て見る話也

多くハ若し論語なと様なる助字多けれも甚き言語應對
の模様を傍より書るに出せしたる体制なれも手本段
多けれハ是を文章の変体なく常法にはあらねどもしかるへ
し用ゆる書なれとも孟子なとハ文章の正格とも云へし

一 物事を詳なる写に猶り同し勤したる折なとぞ手さへ
なし妹うるしなれハ悲しかりし事も元は浮きて思ひ出
けるも富貴なる人の常に侍るを侍るなとの多けれバこの境
ハ知る人も有らまし

一 安藝国廣嶋城下辺にハタ〳〵とゆふものあり是神変の物也
むかしより何者なるを知る人なし夜陰人家窓外様先を
とふ来りて窓近くハタ〳〵と音をたて窓を開けみれハ戸
外には見れども五六丁も遠くに去ると覚えくハタ〳〵とゆふおと
高くいつも此ことて試ひにも何物なるを知ることなしと彼国の
人寿安物語りなりけり

一 余天下を漫遊して海陸諸国の名山勝景僻遠の地
に奇絶の山も多けれど皆記録作りて世の同好の人に志る
せんやと思ひしに既に古賢の記を作れる山々も多けれバ先従
家の詩文集に就て山々の記録を撰み出し集めて携へ置る
山なれども自らも記せんりのをと近頃は見聞を頼に係ひて
記し集めぬるに文人の以て読むも東武港井平左衛門氏志之

て脱なく集めたりといふまで余が集むる所は世に知らる
近年は沼井子も主人に従ひて浪花に来り病ありて死せ
しとぞ其名山池を如何なりしや

一 徂来の書は凡の趣と無他の書家の及ぶ所にあらず
頃霊山惇信廣澤等は世に唱へ明代の書風時運に叶ひ
て行はれし折節にも徂来独り時運にもかゝはらず一家を
成せるは天狗説ありと思ふ墨帖より出来たるといふにて其外
なれども唐土の墨帖の体に変して取ることをなし其本質は至
の楷書にしても兼て只韻致の備はる故なり仁斎先
生は気韻ありて東涯先生書は材餘りありて其韻も示さ

有りて只眼中の書なる故なるべし其他近世名家の書は
一 気は近来の芙蓉篆隷此二体は一種の風韻ありてまた
得易からず

一 印章篆刻の一枝近来は殊に人多し其雅趣気韻あると
んと秦漢の古印に取る所なし文雅の枝の漢土の古代
并も近年は高芙蓉の篆刻の一枝のみなるべし其他書画詩
文も明清にて世界を隔てたり

一 本邦の詩享保以後の作家本邦の古昔に比すれば甚だ
盛なり以後は志ある者是非なく八開闢以来の盛なる時とす
べし秋玉山なとは五絶の一体にては日本開闢の一人也

と自負せられしこそ誠に他人より見るにも奇妙なり
近来には何ぞ学ぶ輩も和様を近衛流といひて貴族とも崇
ひ謗るなるなれども古人よりの名をもとめて此上一変せ
しもあるべし道にあるの域にハ遠く頼みし　誹諧ハ芭蕉の時
我実に盛なりしを極めたるまでといひ去し此後といふべ
をまねば出る時ハ何とも　荒田
一近衛流秋玉山か筆跡を見るに明人の區域を去る事何
ハぞとのへとも　雅趣徂来派の一人なる哉し
一書ハ古今二王をもし主張となしても徒にて後輩を害ひてへうらも
然るに近世只向上の論ハ唯く宋明をも奴隷のごとくに性ん

し学ぶ所二王以下に限らんとして日夜辛苦して十七帖
或ハ聖教序等を摸擬せる人多し今ニ其人の書を見るに形
ニ似ハ墨本の十七帖聖教序ニ似たれど神彩気骨風韻
に至りてハ地を掃ふて去りて無く只徒気近来の鳥石廣
澤の輩にして不及事遠くあれバ何も明人を学んや義之智
永あとハ邈ル矣唐人の如くは深く学び取付色近道論絶て元
ともいふべからされども中ニ得易きにかゝる宋人の気骨
ハ近来あまり　髪鬢と其區域を窺ふ似たる人まるを
見る事ならも是もなにかしきの如くにして虎を画て猫に類せ
ずとの事なり　只明人を以遠隔なる故にや時代近世故なり

徴仲枝山瑞図解神玄宰なとゝ云伝ふ各格なれとも其法
乃人も学びも皆ありて法あし　余も亦其ゝ明人不満なれ
ともえうゝ道ある所の字法ひ明人の区域を出る事能ず
一人ハ天地の益となる事を生し　世界あし　文字有
人も医をもなれを賎しめども今太平の御代不
生きく匠夫の身医業をも外ずしく何事をなしく
人の憂を救ふ事あらんと思ふ

一　塩尻ニ園太暦乃十八巻ありしに兼好法師観応元年二
月病にかゝり　上皇典薬頭和気清丸をして伊賀ま
越ゝ療治せしむ　米穀二千石を賜ふ伊賀守橘成忠使をし
て葵を二月七日く　兼好法師生死無常の恐ある事寄門の
ふ處あとて　業ハ不服米穀を近村乃民ニ施せりといふ二
條良基公年来の和歌の友なりしかば病を問んが為に
そふ伊賀国ニ越す　二月十五日兼好伊賀国見山乃林
田井之庄ニ寂せり　上皇至上湿勅ゝ　同廿五日米穀五
千石鳥目二千貫を賜ひ田井庄ニ墓を築き遍照寺乃僧
ニ命し伊賀国分寺に葬事を勤しむ　同廿七日権僧都を贈
らる　春暉思ふニ兼好ハもと吉田の祠官なく格式の貴
人なりけるぞ又平法を戯玉の流るく隆く安勝なりけれど
病ほかゝりて後の事ハあまりて道なりの事かくや云座實よりか

も違よ人手もふれぬ所に圓大唇ハ怪しむ處なくて歩行をすと云
しさるともあるや

一又塩尻ニ玉ハ拾数の物あり水精珊瑚瑪瑙瑠璃の如きハ真
の玉ニハあらで信景所年玉帯を見しにいと白く
水精のごとく透明ニあり及處々潤て宝代ゆかしく
其茶あるてよそふれことの外有識者云是ハゴクといふ事よ
るく千紋々色々ゆり鬼形獅子唐草唐花等なりとぞ
春暉によれハ外々の珠玉も日本にも多く有しれどもゴクを日本
ニ産する所ありと蕙菴堂などにも物語ありし京都の某家
なる玉帯皆此ゴクを用ゐる大家ニハ傳へ有るよし也と云

御家ニ長サ六七寸幅四五寸許なるを寶とし表ニ彫花
雕ある真に精密殊極めたる事ありと毎度拝見したり何方ニ
ても玉帯に用ひたる彫刻の細工精密を極めたるもの也
實に至宝を如事他の及ぶべからず比類無し絶倫といふべし
也皆唐土の物なりといひ傳ふ何の代の細工なるや

一塩尻ニ海潮の満干を書す大阪より備後の白石の
泊まで凡五十余里なるの潮上へさし汐それより周防の沖より
向ひて四十里海潮上へさして来る又筑前の山より
岬まで四拾里潮下へ満是より西肥前の樺嶋のあたり六十余
里潮又上へ満つ又長門のあたり黒くある潮北の方への

さるをもて見る時按ずるに大洋にかくも潮の東西南北に
ちと論ずるにかくかそくの唐土瓊海の潮なとハ一月の中に上十五日
ハ東へさし下十五日ハ西へさしてと是も亦奇中の最奇なる事
なり松前の海ハ下の海の潮ハ常に大河のことく一方の急流
海中に於て尽るのし落ちて是も又奇なり

一 従越草に伶人龍秋横笛を論じて五の穴ハ柳上も干の穴
より皆穴をもに律を隔て一律ほどを好て五の穴の
上の間に納まるとなれども主ある事をも入てひとつ北安ハ
たゞ不快事あれど此穴をいかに必ずしのけ外なき
調に合ハず吹けるを離しと云し事を載る是龍秋が律

呂に合ふ紀故和琴とよく事を知らざる故なり横笛ハ双調を
調を起して順八に和声を求めて下無に於て止むとし五上
の穴乃ろに一律をぬきてみく息遣を弁ただ横笛一管の調
子法無して楽器とハ成ねる決文中六の穴のろに二律をぬ
きたりとて六の穴を合せて吹けども一越乃真声をえんや
龍秋が考へ徹子荒涼のことなり又景茂が呂律の物に叶ひざる
る人のよがなり器の失にいふもとよひも律呂にあるに学
さざるし妄言なり只龍秋をそしらんとて向上らし紀論をいひ
如くく人を欺しなりと業に来く甚事なくあるもの
足きりとして人を侮て欺くハ憎むべきのなり

一備前乃儒士湯浅子祥が常山紀談とい書ニ加藤清正寒
天ニ朝鮮渡海のおりよみし詩ニ王正美ニ待そらく風劈
面凝裂凍粘髭有声とい云しを近しとせしが余ヶ賀州手取川
乃風雪ニ遇て危霰堅如鐵寒風利似刀と作りしに思合せし
一同書ニ深田直家伝おもて織田の軍ニも従兵馬場十郎鎮
炮ニて右の膝より臂へかけて通されたれども終に引ぞ
とりて逃るなに又背割具足の右の肩より背の中を劈
おきおぬも通りたれども倒れぬ帰る等をわきにもけて九をぬ
さ子全快して十郎語りけるハ鉄炮にあたりて大木を袋
ハ突通すがごとく覚て物の色皆真牛花の色ニ見えたり

と後ニ陽道して農とあり七十七才にて病死せり
一筝もむかしハ義氏もしニ弾せしりや夜霧庭訓ニ寄家
女御筝を弾給ふニ右の御手の爪を失しあり給ひ左ニ
左爪の御手勝ニ弾せ給ひける故ニ後ニハ御爪をせぬも有と
し又大諸ニ芥川行幸筝をひく人ハ皆ニ爪作りて指ニさし
入れてひくとかつ作りともに是等の事ニても思合せし
一三光院殿御説色紙寸法大さ竪六寸四分小ハ竪六寸あり
横ハ大小とも五寸六分短冊寸法貴人ハ長サ一尺五寸八分
幅二寸平人ハ長一尺五寸五分幅壱寸八分らしとあり
一御神楽之次第

一庭燎　二榊木 元末　三韓神 元末
四早神 元末舞アリ　五薦枕 元末　六篠波 元末
七千歳 元末　八早歌 元末五ツ舞アリ　九星 三首
吉々利々 元末　得銭子 元末　木綿作 元末
十朝倉　其駒 元末舞アリ

一國語に載せらる周景王の鑄給ひし無射律乃鐘唐の孔頴達の説に此鐘在王城鑄之敬王居洛陽蓋移就之也秦滅周其鐘徙於長安歴漢魏晋常在長安及劉裕滅姚泓又移於江東歴宋齊梁陳時鐘猶在魏使魏収聘梁収作聘遊賦云珍此淫器無射在縣是也及開皇九年平陳又遷於西京置太常寺ニ時人悉得見之至十五年勅毀之ニ春暉曰是周淫器然而考古律之法物無過之者勅毀之可惜之至也而又怪晋荀勗考古律不言及此鐘不知孔説果是否

一漢土律呂家黄鐘の律を論ずるは句倫之本邦並好ぶ徒然草に黄鐘律の鈞鐘を論せしより後ますます[illegible]人の[illegible]もの真の黄鐘律に触れて疑し又其律の鈞鐘を[illegible]ふかくろ人かれかたく[illegible]余天下に漫遊して數多の鐘を叩きて黄鐘律に近き鐘に稀に[illegible]満寺の鐘古物なりとて寛政四年壬子の甚彼寺に[illegible]大坂天満の北半里許なる長柄村の[illegible]

村本寺と云へる小村の禅院に收まる青眞の黄鐘律之大丗
口の経は曲尺にして一尺九寸五分厚サ一寸五分龍頭此係に営
収まり完内外に透まり銘文二つ収まる一つは緒銘一つは雕
銘なり緒銘は

太平十年二月日〇寺錬梁元〇〇 乙金鐘入三百斤　長二尺四寸二〇

如此く五六字を滅し〻〻
然れとも此銘によりては北燕の馮跋太平廿年戊午の鐘なり
漢土南北朝の時分にして古律も異なる故に此物実に
希代の珍物なり此銘一説に太乃字を天となして聖武天皇
の時此物と云へとも此鐘と同作の鐘三井寺にもありて智
證大師唐より将来の物とかへて漢土乃物にてなり

此なり雕銘ハ六七百年前長門国にて雕しなりよって古
門乃国の寺此名も見えされ其後に寺廃して此鐘久しく
土中に埋まり有しを今より二百年許此所の生つ国にて堀
普請にありし時堀出して国守に納めしを国守此霍満
寺建立の時鐘をも寄附ありしとなり今此事大坂大和屋
といふ家の有とありて其後大和屋の裁判なりしと経緯の緒
の高謂あり
一遍上人筆三井寺塔中徴妙寺開帳の時古鐘の　芝蘭堂冊
寫子知り見る事を銘をおしまする寛政七年乙卯五月　学舎冊
より是おせるかを備りなる

大平四年壬子ハ日本允恭天皇元年也晋安帝義熙八年也

大平四年壬十二月日青八元大寺
鐘百七十斤大匠作金慶則棟
梁六首十四金長沈賢等

是鸛満寺の鐘と同しく北燕乃馮跋大平四年壬子の作
の鐘なり智澄大師入唐ハ李唐の時なれハ唐乃青龍寺より
将来し玉ひしにてあれとも青龍寺北燕ハ時代の寺なれハ唐
に於て求め得ハし給へし此年六月十七日門人辻三清太郎幸輔人
松本六郎三士王命し三井寺に来りて鐘を見せしむる
徴妙寺にいたりて前年開帳の時に出せしと本坊宝蔵中の

鐘なりとて此鐘今ハ本坊金堂の傍乃宝蔵に納めたり 此
宝蔵の鍵ハ頭坊と財還坊と云ふ役者と財林坊と云ふ宝蔵庵の
封ニ一山の封あるや此方に宝を許さずて三十鐘を不見して
空しく帰る 財還坊の話によれハ鐘の長二尺余幅一尺六寸
五分厚一寸三分半 龍頭高サ五寸五分 唐青龍寺の鐘なる
智證大師御朝の時携へ帰り玉ひし物とて此鐘も亦其鐘
律なりやいまた其音を聞さされハ論しかたし

一北燕太平元年北魏の永興元年なり晋乃義熙五年なり
通鑑紀事本末九十八巻馮跋滅後燕篇云緒臣言於燕王
跋曰陛下龍飛遼碣舊邦族黨傾首朝陽以日為歳請往迎

之跋曰道路數千里復隔異國如何可致臣曰章武臨海舟
楫可通出於遼西臨渝不為難也跋許之云云 春暉按高句
麗為北燕属國馮氏之滅二世馮弘奔高句麗男女老幼八
十余萬人皆随此時三韓既為日本属國則北燕貨物傳日
本之多實有故也

一北史馮跋傳曰跋飲酒至一石不亂

一北史藝術傳信都芳傳曰齊神武之亟相倉曹祖珽謂芳曰
律管吹灰術甚微妙絶来既久吾思所不至卿試思之芳留
意十數日便報珽曰吾得之矣然終須河内葭莩灰祖對試
之無驗後得河内灰用術應節便飛餘灰即不動也云云

一琵琶の書に三五要録といふ書あり又三五中録といふ書も
あり琵琶胡琴放録なとゝいふ世間にわたれとも此二書は稀なる
物なり或人の説に三五要録初の所二巻あるを真の古書にて
後の合部十二巻は偽書なり又三五中録も古書は絶て今有
るものは偽書なりとぞいふ事なり彼人の家にある二書は真
の物を御所蔵ありて深く秘し給ひし人間に洩し給はさ
りけるとぞ

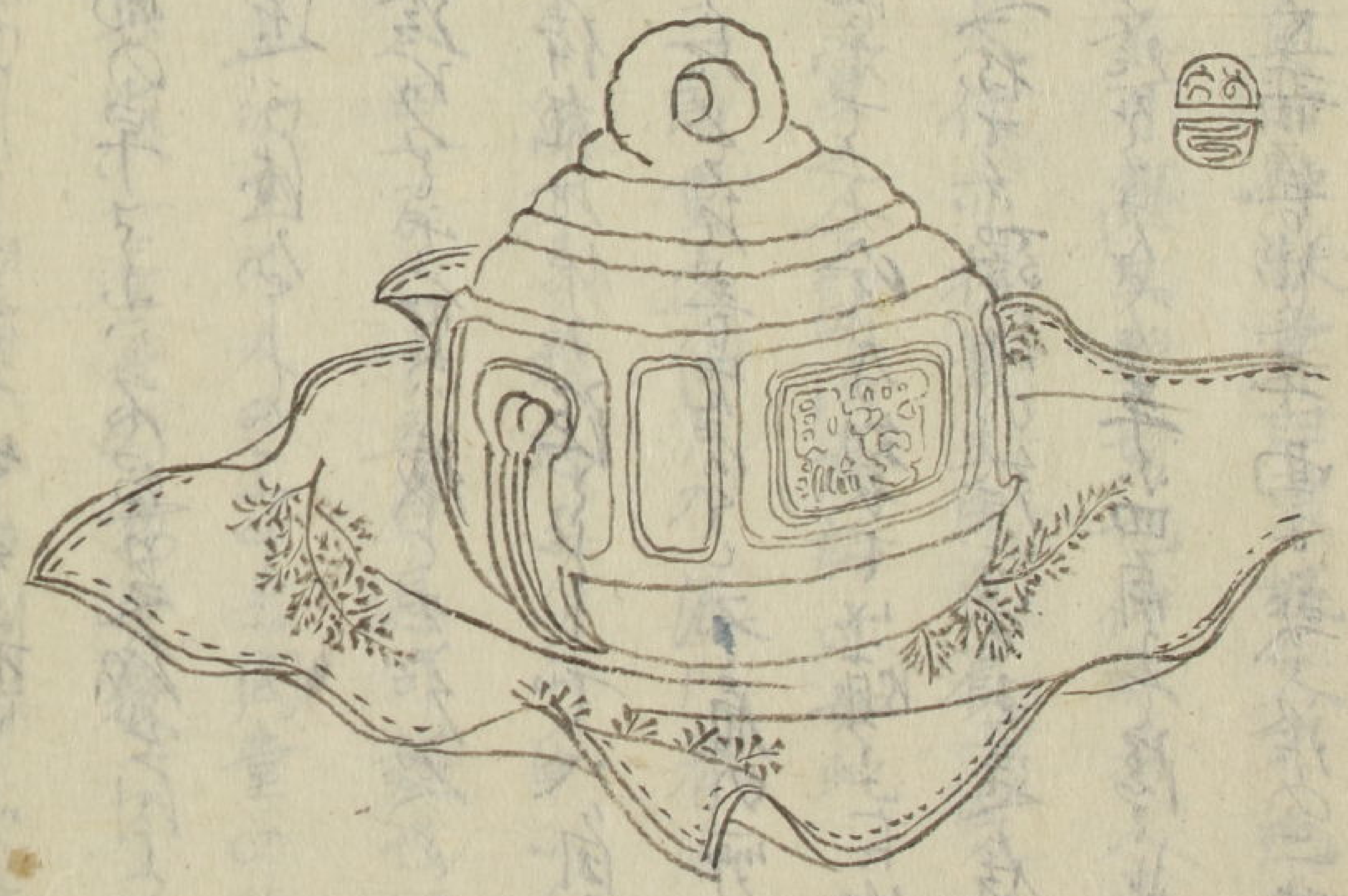
一頌語云唐伯虎曰東坡赤壁二賦一洗萬古欲髣髴其一語畢
世不可得也伯虎亦英才而推奬如此其必有以也近世文人
至非之曰何等狗賦可謂大言不慚矣余意赤壁即自爪賦

来者非耶云云　春暉曰亡友奥田仲献嘗曰東坡文才絶倫如
其赤壁賦学之竭終身力不可得其髣髴也仲献為人豪放
於詩文最其所長雖長編大作亦援筆立成自負才気如所
推然而於赤壁一賦則極口賞之今聞伯虎論亦如此
一泰山集といふ書に佐谷丹三郎重遠江戸の渋川春海に従
ひ学ぶ日千師の語を多く録せられ雑録あり其中に人一昼
夜之息凡二万五千件古人曰一万三千五百息可疑也云々
去ル明和年太田松五郎とふ弱年の人の三十三間堂の半堂
矢数をこころみしを見しに其時の一昼夜の惣矢数一万二千件
前夜の暮六ツ時より射始めし翌日の夕申刻前に終れり

けるに飲食二便のいとまなく又矢のぬけるを稽呼吸に合せ
たるに一息のうちに矢一筋の早さには不過是故を同じく按る
に凡そ二万五千息の方近かるべし
一並河誠所蔵に古き鈴あり其質は鐵にて大さ橘
の大さなるほどの程なし全体丸く其中に溝ありて八角の稜
あり下に普通の鈴のごとく口あり音穴ありて又肩の所に赤
小豆程の小穴を左右に穿てり今乃割裂を八顆に古質之
一隠岐國造の家に昔より伝へ持てる驛鈴の鈴あり其造り在京の
時は余も親しく見たりしが其鈴を見るに平に四角にて隅をとりて
角の稜あり下の方に音穴ありて普通のごとく平面に駅鈴の二字あり

銅乃古色愛すべし実に數千年の物なりとて太清堯舜之
古書なくしよしをいふ
玉造名は幸成姓無く皆佐無
く神孫まく神代よりの今に相續せり詩哥殊に好く之を
唐人なりと云

一佐渡の國よりかまいたちにかゝることあり其氣
の中るところ大きにきれて傷る此時は金瘡の如し從
来ハ膏薬などつけ候ハ皆ことごとく死せるあり只石菖
根一味煎じて洗ふべしとなり又其まゝに捨置く
時ハ数日にして愈ると也　佐渡の外科本多勇伯



余に語り侍りし

一常陸国鹿嶋の神庫にも駅路鈴ハ何ほとなく其絵図なとあり
し小山似の折に錫杖の形にて長き物なりし異製の鈴
にや又天明年間河内国より堀出しはりとて寿紀綱の鍋此
形したる鈴京へ持参して売し人の有けるに並河氏伏見の
宮に御覧に入奉りしに是を取家に無くて叶はざるものとて
價を下されて召置しとぞ並河氏語りし物語なりし也宮よりも
何の御用にかありけん

一清華とい家今官家の名家九家を清華とハ北齊の
顔之推が家訓に出たる字にて六朝の比名ある家柄をいくへ

一浪花の加茂景範ハ和歌の上手にて歌学にも委しくとて京
師まで名誉ある人なり近年も此歌書著述も多し
此頃余彼人の著述の和哥濱土産と云ものを見たり初
るの人和哥の会なとに携る事重寶有益の書なり其中に
小忌衣を注しハ大嘗會新嘗会なとの時禁庭にて舞人
の着する服なりとみえたり終に数里をへだて浪華ハ京にも
隔り居ぬ事にかかる事を述たりけれども坊ざなり歌学者成りにて

一謬まり京の人ならぬ学の人も知りぬる小忌衣ハ祭服なり
るなり大嘗祭新嘗祭其外神祭の時ハ其禮に預る人ハ老若の差別
なく文官武官の差なく皆小忌衣を着する事なり 君

さるに舞楽は何色ぞ舞人も着して舞ふ事は少なりよく舞
人の着たる服と混じて是に倣ふべし

一浪華天王寺の楽人秦正名著述の書に楽道類聚と云ふ
書あり古楽の名状をよく考へしるし其外も楽に付ての
事を輯して集成したるもの多く珍らしき事どもなりと山路氏
の物語なりしが其後浪華にて一覧せり唐土にては絶せし
事故寄りしと護りしが大臣の人の手に紛々の事を
多く載せたる巻数も多きものなり體源抄などにも抜出したる
ものにて思ひの外多く秘したる故に世間には稀
なり今余写して弘めんとは作者の悦びもあらんと思ひし

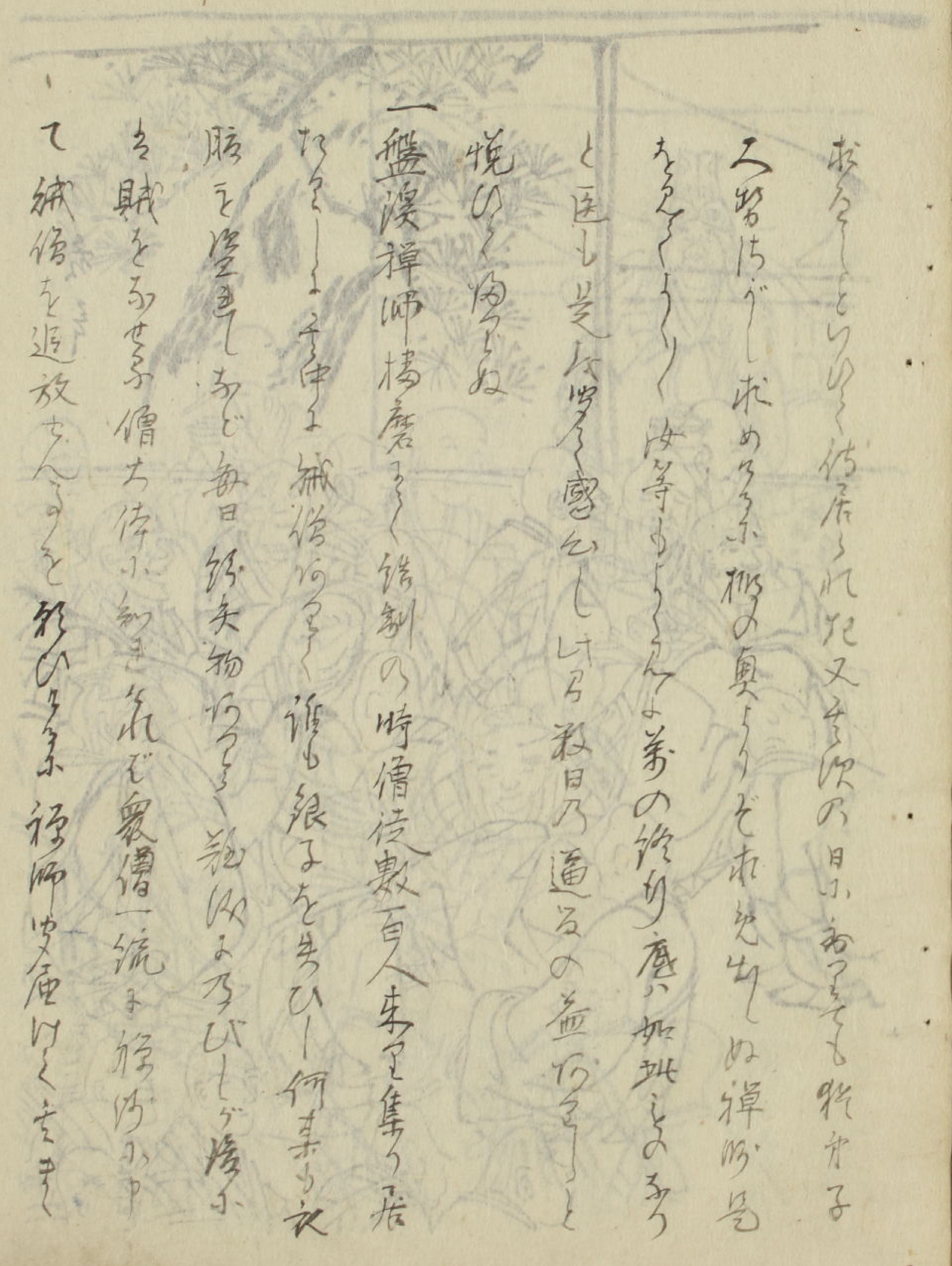
鼎

一天明年間にや備前国犀載ある村の海中より漁人の網に鼎
一つを得たり篆書の銘あり唐土元の世の聖堂祭器に用ひ
たる旧物なる事は文にくはしくしるせしを滄洲翁物語なりき
一それより百年も前にうちあげしを備中玉嶋の浜にて杯の形の
物を見付けるを漁父とも網にて引上たり爵と記形の物
なり此辺の酒肴何来る銘あるものを好める人来りて問ひしや役
處にありて酒に入て飲居しとて漁父ともやがて御酒
一積もりて酒二年ばかり人をもてなし小酒屋の年代経くかく
いふ二角の物酒にうかへてやりたんとうけひいて彼是論し合
くらしけるを聞きぬれば何事ぞやと出て見るに件の具乃付ける

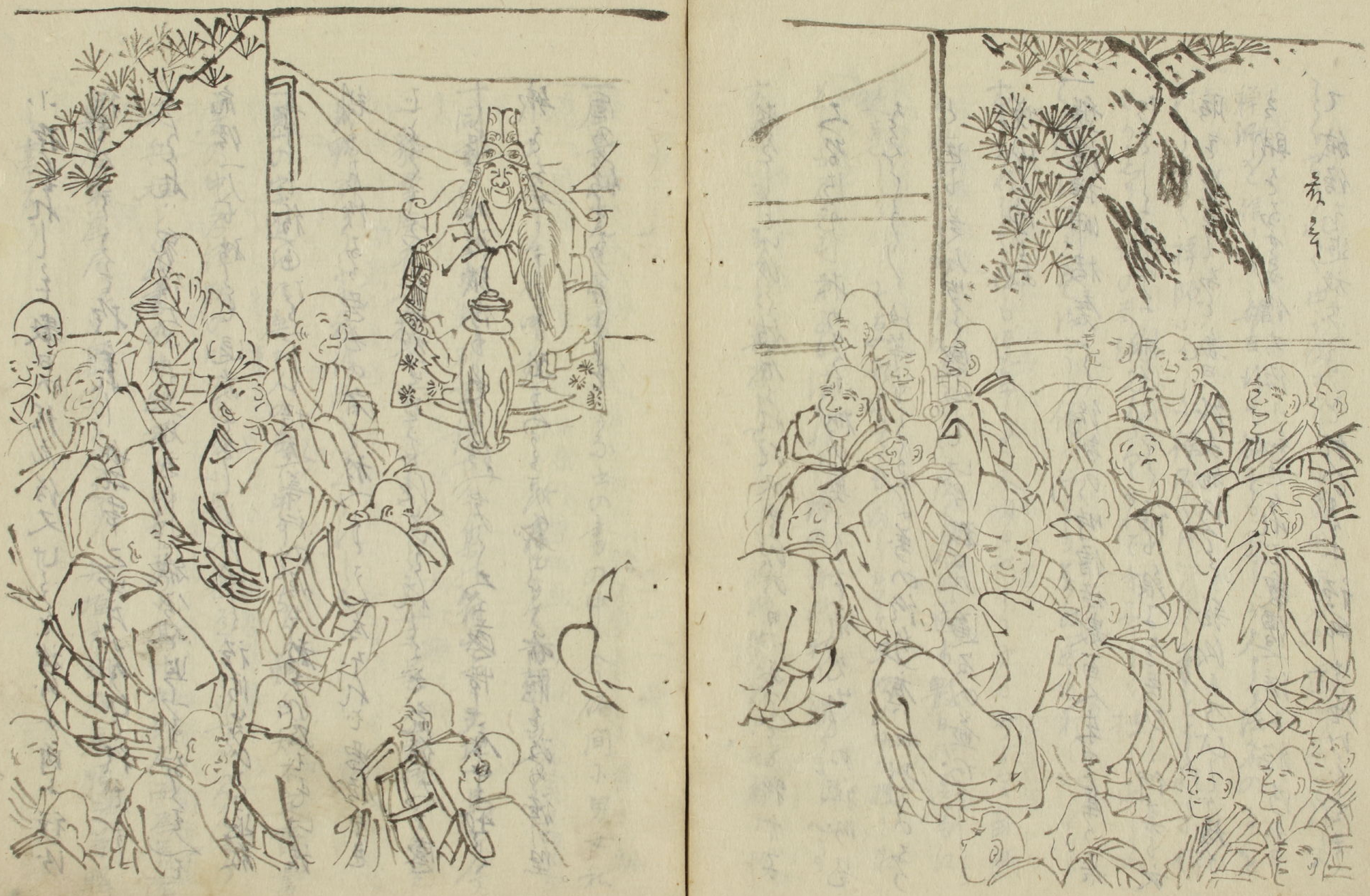
もろ花を捨てゝ実あるにかなり何にもいはれしや酒二升
を酒まても是まて捨来る労も施ちなしとく好く酒
を呑て件の物をえり分間に庭なる建立し数日ありて雨
の後彼物より流をなる雨水に妖気のえしれと内に何ヶ有
をしらく見ほに砕たるに中より刀の身をぬき出しれば
ことにて備前国山の研屋へもちて礪（とき）をかけしに左衛と云銘の
えらく見るに研上なり久しく土中に在しにもかゝわらず腐爛せず今
新に打出せる刀のことしそれより刀鍛のもとより知る人々に見せける
に是を皆伝へしるなり能登守教経所持のサクウ丸と云
太刀の銘なり此は教経の刀までやうあるなと彼酒屋云ふ珍重

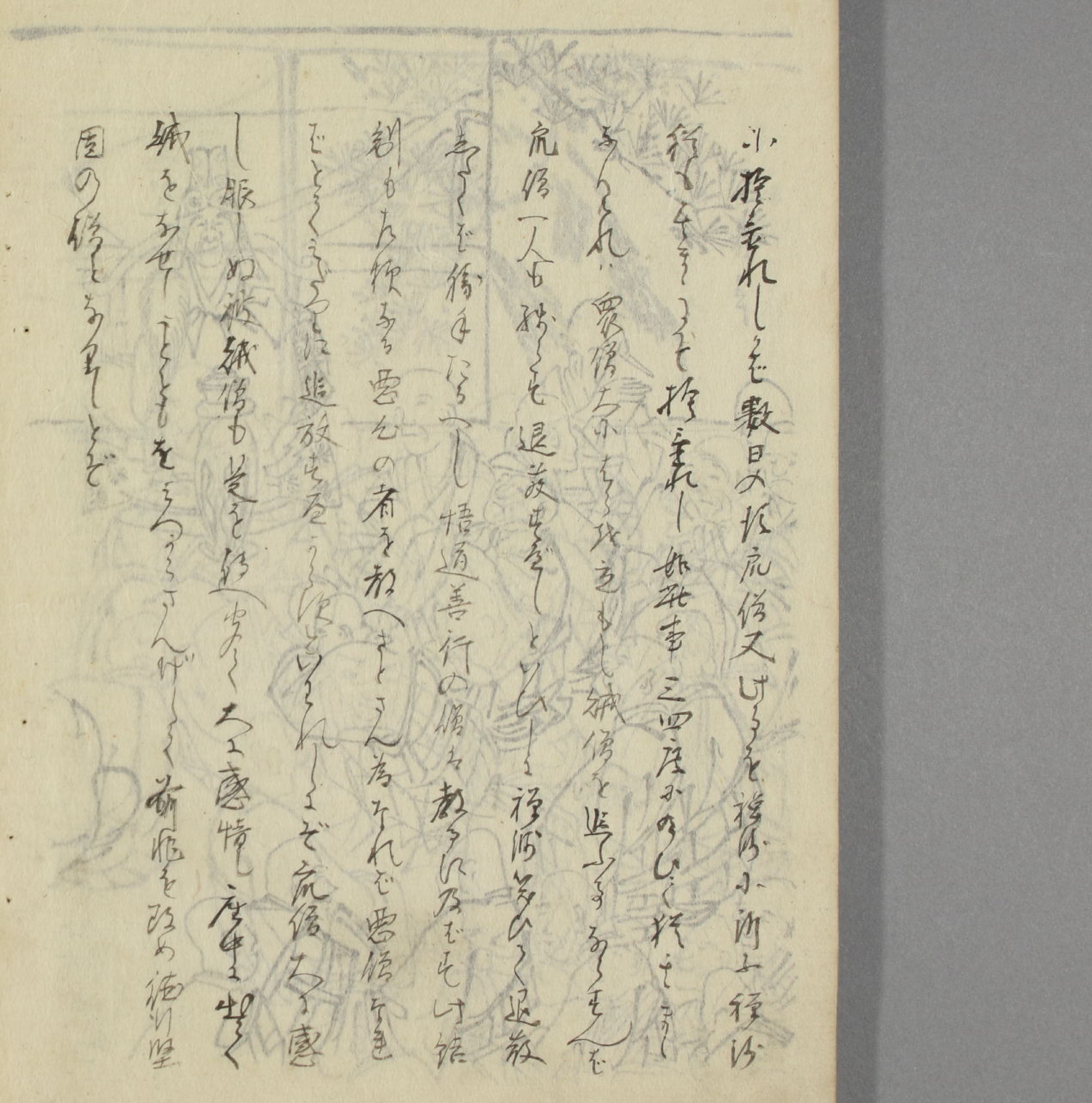
しるべ今は某家に伝へりとぞ是も橋本乃滄洲翁物語なりし
一明の雲棲大師の作に竹窓漫筆といふ書有り禅僧なとにも
文字をも廃せよと書るなり又彼大師の警世四絶に
畏寒時欲暑　苦暑復思冬　忘想能消滅　安身處々同
忖得翻成失　欲東仍復西　未来杳無定　何必豫労思
蠶出桑抽葉　蜂饑樹結花　有人斯有禄　貪者之須嗟
草食勝空腹　茅屋過露居　人世鮮知足　煩悩一時除
一橋磨の盤渓禅師ある人のとふに答へ不應じく法名被出さく字
られしまいに法も文字ものこさず見苦しけれど弟子卦紙を作り
て近くも是をつかはして去りてかへとなし是れよりまされ

こくせられし由が傳わりしに或時明石の医何某が彼く
禅師を信じて無窮れて教をも受しが大より法名の事を
れまいらせく禅師に乞しに禅師うけがひて筆をとられに何
とうまん件の掛紙みえず名れで才子しるく授し來しめ
ら法にてみえ足を附がし倦て來りも是ぬ医も形くかはれる
事あれどその後も逼寄して又明日形に才子出し置掛紙
を求めにとかくみえずて又其後も逼寄医も數日の逗留に
迷惑してたとも來もとても叶はずして又次の日も授しれ
ましもみえざる才子も是れて後の掛紙形に作りなされる
容易の事にも無彦にせしかども禅師笑って欣々も殊に悦



求めしといひて待居られしに又其次の日におゐても形才子
入間待がしれめられに彼の奥よりぞれ差出しぬ禅師是
をみてまうして汝等もよくよく弟の修行慶ハ如此ものなり
と医も是に感心し此ら數日の逼留の益なれると
悦びて帰りぬ
一盤渓禅師摂磨ニて結制の時僧徒數百人來り集りて居
ければ其中に一納僧なりて誰も銀子を失ひし何某が衣
服を盗まして其所ぞ毎日銀失物なるに及びしが後に
之賊をみせ出せり僧大衆に知るる名れど衆僧一統に禅師に申
して納僧を追放なされませと願ひ出るに禅師少も聞入なし




小指失れしかど数日の後尻僧又けるを禅師に訴ふ禅師
指すつぎて指失れし事毎年三四度に及びし故ちかし
あくれば衆僧大に我意もし破僧を追ふ事ありへも
尻僧一人にて辯すも退散せしとひしよ禅師笑ひて追放
あるしかど猶手ならへし悟道善行の僧を教ふに及ぶも叶はず
剃もたち預かる悪乞の者を教へさとさん為なれど悪僧を追
ごとくえども追放せるにさひとしれしまで尻僧大に感
し服しぬ彼破僧も是を聞き大に感悟し座中に出てく
破をあやまりてともをさんげして斬悔を改め徳に望
国の僧となりしとぞ

一屈景山先生の書きし多士の書の中に今俗間に男女礼
に於て過して心中死ぬるを我唐土にて女棚とよぶとぞ
一同書の中に東野列常縁古今集を箱山に天地一集古今
一貉雪風花柜攘千古とよまれしを前是我箱傳と云是
我野列より宗祇法師へ傳へられしと
一鼎の字近江に唐士人の多く用る字なり鮑氏知不足齋叢
書の中孝経跋の所に日本に長崎鼎とよむとみえたり
又兵垣とよむ書の中段都ち日本考に其地九州居西為首陸
奥居東為尾云々鼎の字見えたり兵垣も明乃唐順之等輯
の書にあり

一周行備覧としし書ハ唐本ふて小本五六冊なり唐土の行程
他なり驛々名所古跡菓店等の事まで委しくのせたり理
一天文乃一枝ハ西洋を宇宙第一とも申し推歩側量の精妙言
語ふ絶せり其書ハ霊臺儀象志崇禎暦書最全備乃書ふ
て天文暦学の人も無くて叶はざる書なり大西の天学者なる
利馬竇南懐仁湯若望艾儒略等高名の人多し又地理の
書ふハ職方外紀八荒譯史扆初新志坤輿外紀等其外なほ
多し

一秦の趙高か言葉ふ断而敢行鬼神避之と此八字実ふ豪傑
事を成せる人の語として尊し中心一疑を生ずる時ハ往々の妖
魔起りて第一の妨となり来るものなり

一凡士たる者常に無事閑暇の時ふ其事の道を学び習ひ如
何程も疑を記し切磋琢磨して其上大事ある時ふ至りても
行ふ事を行ふ時ふハ中々聊も疑なく徒に迷うて疑ふ事なき
ふしてある事に逢て能然として行んが為に居常平素の修業
ことなり

一王陽明先生宸濠の叛を伐し時反間を放して如何ふ謀を
謀されハ彼必信を置る漁とし人乃見しに聊も疑ひ用ん
たる事もなきよしいはれしかども人善く謀を練る語
とさされしども第一一反間乃事にあれども一大事の始なれハ

もとより疑ひなく要んも無してとひしらそ王陽明悦ひし君
惑の一疑をおしねも秋月殿といはれし

一明乃暦長卿か作の山中一夕話といふ書に天狗の字出て
日本の天狗乃ことに類せることあり

一松永彈正忠貴山落城の時常々秘藏の平蜘蛛の釜を欲
のもとに渡さんことを余念に思ひて火中に投して砕し侍
れ人ひそかに拾ひとりて兆まして今に伴賀の何がしの家に
秘藏せりとぞ手記を深谷翁に於てもみし彼翁物語りけり
花真の物なりやいぶかし

一寛政四年壬子四月のことなりし山城國淀の小橋大路といふ里
にて宇村の庄兵衛を若左衛門といふ者家の裏の藪際に土
藏あり其藏の傍に大きなる銀杏樹の樫近年大風にて折れ
落て其藏の屋根に枝かかり松は落しかれば若左衛門松をや
といて枝を切掛らせ候に脇下より切落して当家へ参り
けりし上に登りこれより二の所にて新造の二つまでに成る
枝を切んとせしに俄に疾風吹来て松が首筋を何やら物にて
ゆく吹きゆるやうに覚へし其の毛をつかまれて松大いに驚き
急ぎ逃げのがれんとするに首筋元の毛つかみてひきあげて顔色土
のごとくに成りて若左衛門も驚き何事ぞやといふに松はあれこそ
天狗の住所なり切らせし故にこそと思ひて今おそしけん

かくて一命をも生きん人を粧妝上の小堂もわたらしとて係に
樹木ニ神商を結ひ冠を掛し退かれしより（の）供餝など
ありて近場なり　と云ふにの所を甚清浄なく隊なるに
いかなる何ぞ田神物のなし住居ならやと苔屋つもりきま
て報銀杏樹を殺しけるにけり善屋へ親れの宮古慶へ物語
なりし

一泉州堺の医小出井宗琢といへる人なりき四代まへの宗
琢名医の名高かりし或夜一老婆来りて其村の者にて今子
の病危ふき夜と来りいふと云ひしかど宗琢は既に出て逢ふ枚始
何ならん病にとて問ふ被はうら おふわひてきたる所謂盗賊のくせ

なかく難義なれど なされ君の御薬調合へ赴かしむべし此老医
しかれども餘義なく招かれて宗琢皆く四療しまいらせ
とし薬をあたへて理語なく弟子なる者とも快しまして病も
なかりけれ宗琢先生の薬我ゆへ猶上き如何なる宗琢言へく
我は医業の位られど薬我ゆへなり病気も稽古の為にまいりて見
まさいられしかど皆思ひける容ちなり然る故ひとえにも向気
されども我も肺臓を乾かす薬をあたへまとし常に咳
嗽出して盗人の業ハ叶ふまじとのがれし秘智の薬なり

一並河五一郎同勘助の父を並河孫右衛門といひし丹波国並河
村の人なり孫右衛門丹波より山城国多羽村へ出て米商ひを

なせり五一郎勘州兄弟幼にして近所の人等列なりて四書の
一素読を学びせらるに或日論語の秋堂に弟子を召しぞなど
語りおいて章を読みて笑ひ是を悟しむるなりとて文
の悪事はあるめぞ子何すて来しといふ所ゆやとひるる
にやがて次の孔子の御言葉を学びかく悟らるべのもと
孔子ある新なる人なりと云けるしとぞ語しける文盲無学の
人なる四書の素読をも好く少様の人ありしと唐人
所のものごとし五一郎勘州のみとりおきしけるを子孫並河
結物語あり
一並河勘州は天民といひし五一郎の弟なり二十才の時仁齋

先生に従ひ廿六才乃時仁齋の経義に不審ありて一日
大に論じ先生は自身の所見の見識ありしとぞ然れども仁
齋先生一生は師恩を敬ひて我が作も遂に言ずして仁齋
歿後に至りてしとて天民素質の質ありて
程無く四十にて死せりされど五一郎と号す五畿内志撰
述せんとを存せしに頼みとてもはらの公儀より仰付らるるまで御
公儀にて五畿内何方へも沸騰しまで五一郎巡行し神社佛閣
並に諸家の秘記秘物語を一読して五畿内志成就し宇本
一冬官へ献上せり享保年中修道三浦に隠
棲を建立し自身の居室をも構へ年七十余健かに三浦にて

諺ありとて

一唐土の医ハ文勝て質なし日本の医ハ質ありて文なし

一薬の効ハ診察にありて人を診するハ難くしてつらく診するハ易し余医とならずしていかなる大病の時とても他人の薬を服とし来るし人を診察せず自ら察りて後ニ明らかなる有ることのなり

一駿河国府中七間町挽物屋を業とせるもの天文の心得ある人にて北極星を測り又京府中其人町ニて測るに富士山の八合目ニて測るに八尺上度半度差とあり富士山ハ三千九度ニ及ぶなりと語りぬと如意道人物語りし

一尾張の国名古屋のかたはらに前津といふ所あり此所の人小白翁といふものが古鏡を多く所蔵せりとて余もその所持の非代鏡なりの墨ニ摺りたる拾五六枚見たり

一播州加古川の驛の南半里ニ刀田山鶴林寺といふ古き寺有聖徳太子の建立れ寺なり其時分の堂宇今ニ残りて有此寺の鐘古物なり常に格なる妙なる音を戒る尾上の鐘小ぶりなり高サ二尺四寸鐘の差又寸五分厚サ二寸許にの徳ニ穴有りて穴ニ管ありて管の長サ七寸五分周り七寸穴内外ニ通じて其律一越の調律なり其余他の尋常の鐘の音よりも格別に実なりと皆的然し余若くして

梁武帝の時の物なりやと見ゆる梁朝より日本往来ありし證
物もなきなりと見ゆ又律一鈍の清濁なると平部伶人家に伝
来なきの黄鐘律を今の律管の一鈍に用ることいはれたるか
みや 但其の説なく古の黄鐘律今は黄鐘律不用なるを
以ばなれとも此鐘一鈍律なるにも深記はなきかなしと思はる

一泉州堺の東六七丁ばかりに仁徳天皇の陵あり俗に大仙陵
といふ甚だ大きにして南北に長し高さ三四五丁餘もあり周
廻に池を陵より北の方より南の方へ廻し樹木鬱蒼生茂れり
是大なる丈夫造の園山のごとく人作ならぬやうに見えたり今も樹
木を伐り下草を刈る事も官より禁じ新人の入る事をゆるさず
天下の陵の大なるは此陵を第一とすべし

一但馬国竹田といふ所に民家の娘ありて不通なる男ありて孕みしに
夜な夜な通ひて懐妊し平産しけるに四つ足の虎毛なる子を産む形
猿のごとく頭は人のごとく手足狐なれども首は狐のごとく身は
人のごとくあり狐の男に化して密通せしにやいかにもあやしく侍
丹東所物語りなり